

# オンデマンド看護過程展開とハイブリッド基礎看護学実習のための看護教育方法の提案

著者	中村 昌子, 櫻井 美奈, 山住 康恵, 竹安 晶子, 畑山 律子, 中原 るり子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	8
ページ	45-53
発行年	2021-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003427/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003427/</a>

# オンデマンド看護過程展開と ハイブリッド基礎看護学実習のための 看護教育方法の提案

Proposal of an instructional strategy in nursing education for on-demand course of  
nursing process theory and hybrid fundamental nursing practicum

中村 昌子 櫻井 美奈 山住 康恵 竹安 晶子  
Masako Nakamura Mina Sakurai Yasue Yamazumi Shoko Takeyasu  
畑山 律子 中原るり子  
Ritsuko Hatayama Ruriko Nakahara

キーワード：看護過程展開、基礎看護学実習、オンデマンド授業、ハイブリッド実習

key words : nursing process theory, fundamental nursing practicum, on-demand learning, hybrid practicum

## 要 旨

A 看護系大学では、COVID-19 の影響により 2020 年度前期のすべての科目と実習がオンデマンドとなった。看護過程展開論もオンデマンド授業となり、学内ネットワークシステム (kyonet) の授業およびディスカッションボード機能 (プロジェクト学習) を用いた課題提出とグループワークを実施した。基礎看護学実習Ⅱは、臨地での実習が困難となったため、ハイブリッド実習にて実施した。ハイブリッド実習では教員が難易度を考慮した事例を設定し、看護過程展開論の授業方法と同様の方法で実施したため、学生は混乱なく実習を進めることができた。模擬事例を用いて既習の方法と同様に情報収集を行い、援助実施においても慣れ親しんだ学内の環境で実施できた。また、プロジェクト学習の利用により、学生は他の学生の成果物や指導内容を閲覧でき、学習内容を共有できたことと、教員が解答例を提示したことにより、学生は自身の修正点に気づきやすくなったと考えられた。

## I はじめに

A 看護系大学では、COVID-19 の影響を受け、2020 年度前期科目がすべてオンデマンド授業となった。実習科目についても、実習施設 (以下、施設) の状況を受けて学内での実施を余儀なくされた。本稿では、2 年次生の看護過程展開論と基礎看護学実習Ⅱについて述べる。

2 年次前期開講の必修科目である看護過程展開論では、例年、講義後に学生は手書きした課題を提出し、対面でグループワークを行っていた。今

年度は看護過程展開論もオンデマンド授業となったことから、課題は学内ネットワークシステム (以下、kyonet) の課題提出機能、グループワークはディスカッションボード機能 (プロジェクト学習) を使用する方法に変更した。

基礎看護学実習Ⅱは、2 年次後期開講で、4 施設を使用して臨地実習を実施していた。今年度は、臨地実習が困難となったため、ハイブリッド実習 (オンデマンドと同時双方向および対面) にて実施した。例年の臨地実習では、1 名の受け持ち患者を担当し看護過程展開論で学んだ方法を用

いて、看護過程を展開する実習である。通常、臨地実習では受け持ち患者毎に情報収集の方法や援助の実施は異なるため応用が必要となる。中本ら<sup>1)</sup>によると、学生にとっての実習の困難感「看護過程の展開」「カンファレンスの運営と討議」「患者との関わり」「指導者との関わり」「看護援助の実施」とされ、そのうち基礎看護学実習で最も困難感の高い因子は「看護援助の実施」であった。看護援助の実施時の困難について、青木ら<sup>2)</sup>は、学生が学内で学習した手順・物品、設備と異なることに戸惑っていることを明らかにし、学内での臨場感ある演習が必要であるとしている。ハイブリッド実習では、あらかじめ事例を設定することにより難易度を調整できる点や、学生が慣れ親しんだ授業方法で使い慣れた物品を使用して学習を進められるため戸惑いが少ないと考えられる。

今回は、COVID-19の影響により対面授業と臨地実習が制限されたことにより新たに計画した、オンデマンド授業による看護過程展開とハイブリッド実習による基礎看護学実習Ⅱの教育方法についてこれまでの方法と比較しながら報告する。

## Ⅱ 看護過程展開論の授業展開

### 1. 科目概要

この科目は、2年次前期開講の1単位30時間の演習科目であり、必修科目である。看護実践において基本となる看護過程の展開について理解する。対象の健康問題を解決するために必要な、アセスメント、看護問題の明確化、看護計画立案、実施、評価の基本などの一連のプロセスについて「問題解決思考と行動」の観点から理解し、実践できるようにする。また、看護過程を支える様々な看護理論についても理解を深め、対象の置かれている状況や場面に応じた、適切な理論を活用して看護過程が展開できるよう演習を通して学ぶ。

### 2. 科目到達目標

科目到達目標は、以下の通りである。

- 1) 看護過程の意義・目的を説明できるようになる。
- 2) 看護過程の各段階について説明できるようになる。
- 3) 紙上事例の看護過程の展開を行い、看護過

程の一連のプロセスを理解できるようになる。

### 3. 授業方法

#### 1) 2019年度までの実施状況

始めは学生一人で紙上事例の展開を行いながら、看護過程展開方法を学んでもらった。講義後、事例の課題に取り組んでもらい、手書きで翌日提出とした。提出物には科目責任者がコメントを個別に手書きで記入して次回の授業前に返却した。次にグループワークで協力しながら、学んだ方法を使ってDVD事例で看護過程を展開し、立案した計画に沿った援助と評価までを実施できるようにした。グループワークには、基礎看護学領域の教員6名全員が参加して指導を行った。紙上事例は1年次から演習用の事例として設定している肺炎の老年期女性とし、DVD事例は医学映像教育センターの事例DVDのうち、大腿骨頸部骨折、糖尿病、肝炎、心不全などの合併症のない事例から1例を選択していた。

#### 2) 2020年度の授業展開とスケジュール (表1)

##### (1) 授業展開の概要

この授業はオンデマンド授業導入初期の開講であったため、学生がオンデマンド授業のためのkyonetシステムや操作に慣れていないことにも配慮する必要があった。そのため、通常の授業と同様の形式を踏襲した展開とし、学生の混乱を最小限にするようにした。始めは学生一人で紙上事例の展開を行いながら、看護過程展開方法を学び、課題はkyonetの課題提出機能で提出してもらうようにした。その後、グループメンバーと協力しながら、学んだ方法を使ってDVD事例で看護過程を展開してもらうことについては例年同様とした。対面での実施は困難であったため、グループワークにはプロジェクト学習の中の、ディスカッションボード機能を使用し意見交換できるようにした。ディスカッションボード機能では意見交換をそのまま残すことができるため、時間を経ても意見や学びを閲覧することは可能となったが、グループワーク時に即時に指導することは困難であった。

看護過程展開論では、マジョリー・ゴードンの11の機能的健康パターンをアセスメント枠組みとして使用している。2020年度より、情報、ア

表1 2020年度看護過程展開論 スケジュール

回	内容	公開資料等	提出物
1、2	看護過程構成要素説明、情報収集・整理説明 ワーク：情報整理 提出後：紙上事前学習成果共有、情報整理共有	事前学習手引 事前学習課題	事前学習課題
		ディスカッションボード	質問・意見・感想
		授業資料 PDF・動画 記録用紙	事前学習 情報収集シート
3、4	アセスメント情報の統合、関連図説明 ワーク：アセスメント、関連図作成 提出後：アセスメント、関連図共有	授業資料 PDF・動画	アセスメント 関連図
5、6	看護問題抽出、看護目標設定、看護計画説明 ワーク：看護問題リスト作成、看護計画立案 提出後：看護問題リスト、看護計画共有	授業資料 PDF・動画	看護問題リスト 看護計画
7、8	看護計画の実施・評価・修正説明 ワーク：紙上事例修正 授業後：小テスト、紙上事例のまとめ共有	授業資料 PDF・動画	修正した記録物
		小テスト 10 問 紙上事例解答例 PDF・ 動画	小テスト
9、10	DVD 事例提示 ワーク：事前学習補充、DVD 事例情報収集整理 提出後：情報整理共有	DVD 事例 PDF・動画 記録用紙	情報収集 アセスメント 看護問題リスト
		ディスカッションボード	質問・意見・感想・ 学習共有
11、12	アセスメント、関連図説明、 ワーク：DVD 事例情報収集、アセスメント、関連図作成	資料 PDF・動画 ディスカッションボード	看護計画
13、14	看護計画、看護要約、カンファレンス説明 ワーク：看護計画の立案、カンファレンス 提出後：DVD 事例まとめ共有	資料 PDF・動画 DVD 事例解答例 PDF・ 動画 ディスカッションボード	看護計画評価 看護要約 討議記録
15	試験、まとめ	終了時試験	

セスメント、看護上の問題が一枚の用紙に記載できるように工夫し、受け持ち患者の全体像がつかみやすく、情報が一元化できる受け持ち患者情報用紙を導入した(図)。オンデマンド授業では、手書きの記録用紙を提出するため、学生自身でファイル添付する必要があるが、記録用紙が減ったことにより、提出時の手続きも大幅に簡素化された。さらに、学生が情報収集しやすくなるようにあらかじめアセスメントの視点とアセスメントに必要な情報リストを作成して提示した。立案した計画の実施と評価については授業と模範解答の提示で補った。質問についてもディスカッションボード機能を使用して、随時対応し内容を共有した。即時の指導や対応は困難であったが、必ず助

言し回答することで、学生の不安を軽減できるようにした。

### (2) 事前学習課題

事例は、紙上事例(肺炎、70代、女性)1例、DVD事例(肝硬変、40代、女性)1例とした。事前学習課題は、提示する2事例に合わせ、老年期女性の特徴、肺炎、成人期の特徴、肝硬変とし、授業開講前に、事前学習方法の資料とともに提示した。

### (3) 授業形態と出欠席の把握

授業はあらかじめ作成した音声付パワーポイント(以下、PPT)動画と配布資料(PDF)および課題をオンデマンドで提示した。閲覧期間を設定し、期間内に閲覧がされていない学生と課題提

基礎看護学実習Ⅱ 実習記録用紙 No.② 受持患者情報用紙 学籍番号: \_\_\_\_\_ 氏名: \_\_\_\_\_

価値・信念	コーピング・ストレス耐性	セクシャリティ・生殖	役割・関係
健康管理・健康認識	A氏: 歳代 性別: 診断名: A氏の現在の状態についてのアセスメント:  A氏の看護上の問題:		自己知覚・自己概念
			認知・知覚
栄養・代謝	排泄	活動・運動	睡眠・休息

図 受け持ち患者情報用紙

出がなされていない学生には個別連絡し、授業の閲覧と課題の提出により出欠席を把握した。

(4) 質問対応とグループワーク

質問対応は、kyonetのディスカッションボード機能を設定し、学生がいつでも質問でき、質問内容は履修者全員と担当教員がすべて共有できるようにした。

グループワークは、1グループ4名合計23グループのディスカッションボードを設定し、授業時間を中心にして、オンデマンドでディスカッションが可能な場を設定した。教員は随時、23グループのディスカッションボードの内容を閲覧して、可能な限りコメントを残すようにした。

(5) 授業内課題

課題は例年と同様としたが、課題作成は手書きでも課題用紙 (Microsoft Word 文書) に直接入力でも可能とし、手書きの場合は撮影やPDF変換によるファイル提出とした。提出については余裕を持った期間として授業5日後とし、他の授業

がない週末も活用できるようにした。未提出学生には、kyonetによる掲示もしくはメールにて提出を促した。提出を確認した科目責任者からは、次回授業日までに個別に課題のフィードバックをした。課題の解答例は、例年は提示していなかった。しかしながら、対面での個別の対応が難しいことや、質問しにくい学生もあること、自己学習をすすめる際にも自分でも理解しやすいことを考え、解答例の提示を行うこととした。課題毎に提出物の中から模範解答を複数抽出し個人が特定されない形で提示し、科目責任者が作成した解答例も配信した。

4. 科目目標の到達について

看護過程の意義・目的、看護過程の各段階の説明については、Web試験を実施した。事例の看護過程の展開を行い、看護過程の一連のプロセスについては、課題提出期限に遅れた学生もあったが、科目責任者の個別対応により遅れながらも課

表 2 2020 年度 基礎看護学実習Ⅱ スケジュール

	10:50	12:00	12:20	13:20	15:10	16:10~16:40
1日目 初日	情報収集と整理 (オンデマンド)	報告 (Meet)	昼食	情報収集と整理 グループ学習 (Meet・ディスカッションボード)		カンファレンス (Meet)
2日目 ～ 3日目	アセスメント 計画立案 (オンデマンド)	報告 (Meet)	昼食	アセスメント 計画立案 グループ学習 (Meet・ディスカッションボード)		カンファレンス (Meet)
事例 A	9:30	11:00	12:00	13:30	14:30	16:10~16:40
4日目 または 5日目	更衣 教室①	計画発表 計画実施 報告 (対面)	更衣 教室② 交替	計画発表 計画実施 報告 (対面)	更衣 教室① 交替	計画発表 計画実施 報告 (対面)
事例 B	9:00	10:50	12:20	13:20		16:10~16:40
4日目 または 5日目	計画発表 指導 計画修正 (Meet)	計画実施 (Meet)	昼食	計画評価 (Meet)		カンファレンス 最終カンファレンス (Meet)
	9:00		12:20	13:20	14:30	~17:00
6日目 最終日	学びの共有 まとめ資料の作成 (Meet)		昼食	学びの共有 (Meet・ディスカッションボード)	ピアフィードバック (オンデマンド)	記録提出 (オンデマンド)

\*事例 A と事例 B は 4 日目もしくは 5 日目のいずれかに実施した

\*\*事例 A は 1 日を 3 クールにわけいずれかの時間帯で実施した。援助の実施時間は 90 分以内とした。

事例 B は 1 日を通して Meet で実施した。

題に取り組むことができた。さらに、課題の解答例を確認し教員からフィードバックを受け、ディスカッションボード機能を使用して互いの考えを共有しながら課題に取り組んだことなどにより履修者全員が科目目標に到達した。

### Ⅲ 基礎看護学実習Ⅱの展開

#### 1. 科目概要

この科目は、2 年次後期開講の 2 単位 90 時間の実習科目であり、必修科目である。さまざまな健康機能障害をもつ入院患者の健康回復のために、一連の看護過程を通して、安全安楽自立の視点を踏まえた個別的な援助を提供する能力と態度を身につける。

#### 2. 実習目標

実習目標は、以下の通りである。

- 1) さまざまな健康機能障害をもつ対象の健康上の課題について支援を得ながらアセスメントができるようになる。
- 2) 科学的根拠に基づいた看護を理解し、安全・安楽を確保して支援を得ながら援助が実施できるようになる。
- 3) 支援を得ながら思考過程を他者にもわかるように表現できるようになる。
- 4) 支援を得ながら報告・連絡・相談ができるようになる。
- 5) 基本的な学習方法と態度を身につけるようになる

#### 3. 実習方法

##### 1) 2019 年度までの実施状況

2019 年までの実習では、学生は患者 1 名を受け持ち、6 日間の臨地実習と 2 日間の学内実習で

看護過程を展開していた。実習最終日は実習全体を振り返り、資料にまとめて発表し、体験を共有した。

1 病棟当たりの学生は5~6名で構成され、1名の教員が指導を担当した。なお、担当教員は、基礎看護学領域以外の領域の助教と助手の協力を得て構成されていた。

## 2) 2020年度の実施状況

### (1) 実習スケジュールとグループ構成

全体の实習スケジュールは、表2のとおりである。1名の紙上事例を担当し、4日間で計画を立案して、5日目と6日目は実施と評価に充てることとした。5日目と6日目のうち、いずれかの90分は看護実習室において立案した計画を実施した。その際、患者役は同じグループの学生が担当した。最終日は従来と同様に、実習全体のまとめとして、実習グループで資料を作成して発表し、発表後にピア評価を行った。

グループ構成については、臨地実習と同様に1グループ5~6名の学生につき実習担当教員1名とした。実習担当教員には基礎看護学領域以外の領域の助教と助手の協力を得て、合計17グループとした。

### (2) 事例と展開方法

事例は大腿骨頸部骨折の老年期女性（以下、事例A）、糖尿病教育入院の壮年期男性（以下、事例B）の2事例とし、医学映像教育センターの事例DVD<sup>3)4)</sup>から、一部を引用して音声付PPT動画とPDFを作成した。実習グループ内で2名以上が同じ患者を受け持つこととし、1事例に偏らないように調整した。事例の情報は最初からすべてを開示せず、初日は年齢・性別・疾患名のみを配信し発達段階および発達課題、疾患に関する自己学習を課題とした。1日ごとに段階的に患者情報を開示するようにし、学生が理解を深められるように配慮した。これは、臨地実習の学生の情報収集の進捗と同じように進めるという観点からの構成である。

毎日の課題であり成果物である実習記録は、異なる視点を獲得することとメンバーの進捗状況を把握して進捗を確認するために、kyonetのディスカッションボード機能を活用した。さらに、実習担当教員からの各学生へのコメントもディスカッションボードに書き込むようにした。これに

より、グループメンバーの成果物を互いに見ることができ、助言内容を含めて参考にして学びを共有できるようにした。

また、Web会議システム（Google Meet：以下、Meet）を活用し、個別指導の時間を設け、実習担当教員と学生が1対1で話し、個別指導を受ける機会を得られるようにし、学習支援が可能ないように工夫した。

### (3) カンファレンス

カンファレンスは実習の進捗に合わせて毎日テーマを設定しMeetで実施した。グループごとに情報を持ち寄り、メンバー間で曖昧な点や不明な点を解消できるようにした。学生間で解決できない場合は、実習担当教員が助言・指導をした。

### (4) 援助の実施

援助の実施は、学内の実習室およびMeetで行った。それぞれのグループで患者役と看護師役を設定して援助が実施できるように計画を立案してもらった。

事例Aについては、対面での援助が実施できるよう設定した。各グループ2~3名が事例Aを担当するため、計画内容に合わせて1人もしくは2人で患者役の学生に援助を実施した。実施された援助は、床上洗髪、体位変換、足浴、更衣などであった。

事例Bについては、糖尿病の教育入院患者への援助であるため、指導を想定し、Meetで患者役の学生に援助を実施した。実施した援助は食事指導や生活指導についてであった。グループ全員から立案した計画や作成したパンフレットについての意見を求め、修正したパンフレットをMeetで画面表示し患者役の学生に指導を行うようにした。

いずれも実施後には患者役や同じ患者を受け持つ学生からのフィードバックを聞き、援助の評価を行った。

### (5) 援助実施時の感染防止策

実習室で援助を行う際の感染予防対策としては密を避けるため、1回の実施時間に実習室に滞在するのは3グループとし、実施日を2日に分けることとした。更衣は最大18名に対し100名定員の教室を準備して、2つの教室を交互に利用した。使用後には換気と消毒を行った。更衣教室入室前に着用していたマスクは援助実施には使用せず、

新しいマスクとフェイスシールドを着用した。

#### 4. 科目目標の到達について

今回2事例を用いて、オンデマンドではさまざまな健康機能障害をもつ対象の健康上のニーズの全体を把握し、Meetと対面による実施によって看護過程を通して看護実践を体験した。また、ディスカッションボードの使用により、グループメンバーと協力して、アセスメントした科学的根拠に基づいた看護技術とは何かを考えながら、患者の安全・安楽を確保した実施も体験できた。実習の不合格者はいなかった。

### Ⅳ これまでの方法との比較

#### 1. 事例

看護過程展開論では、これまで紙上事例を1例、DVD事例1を1例展開していた。事例は、これまでと同様とした。ただし、DVD事例については、今年度は著作権上の問題から、既存の教材<sup>5)</sup>を引用して科目責任者が再構成して作成した音声付動画を使用した。基礎看護学実習Ⅱにおいても、看護過程展開論と同様に既存の教材<sup>3)4)</sup>を引用して科目担当者が再構成して作成した音声付動画を事例として使用した。事例の難易度は、臨地実習を経験していない学生が展開するため、看護過程展開論の事例と同程度に設定した。

#### 2. 実施方法

看護過程展開論は、事例を用いた授業であることは変わらない。授業を配信したことで課題提出をWebにしたこと、グループワークをディスカッションボード機能にしたこと、記録用紙の変更と履修者の解答および解答例提示は大きな変更であった。

基礎看護学実習Ⅱでは、例年看護過程展開論で用いた枠組みを使用し、記録用紙も同じ形式を使用してきた。この点は、2020年度も同様である。グループワークが実施できないため、ディスカッションボード機能で互いの意見交換や情報共有の場を設け、Meetを用いてカンファレンスを実施した。また、臨地実習では受け持ち患者の看護展開についての指導をすることはあっても、模範解答を提示することはないが、今回は看護過程展開論と同様に解答例を提示した。

#### 3. 教員間での情報共有

看護過程展開論は科目責任者1名の他、領域の教員3名、助手2名(以下、担当教員)で運営している。課題点検については、科目責任者の責任で実施しているが、授業内容は担当教員で共有してグループワークの指導をし、随時情報共有を行っている。2020年度については、科目責任者が課題点検とフィードバックを行い、担当教員には随時、ディスカッションボードを閲覧して、可能な限りコメントを残すようにしてもらった。課題やフィードバック、ディスカッションボード機能はすべての教員が閲覧可能に設定することで情報共有を図った。

基礎看護学実習Ⅱでは、例年同様に看護過程展開論の担当教員以外の教員(以下、実習担当教員)も実習指導を担当するため、実習担当教員には事前にオリエンテーションを行い、看護過程展開論で使用している授業資料をすべて共有して、いつでも閲覧できるようにした。今回は特に、指導に際し、情報共有ができるようGoogleドライブのフォルダを設定した。質問と回答についてもファイルを作成して一元化して共有できるようにした。事例の指導については、通常の実習では実習担当教員にゆだねられている。今回は初めてのハイブリッド実習であるため、実習担当教員に事例を実習開始前から提示し、解説と解答例の閲覧も可能にした。ディスカッションボード機能はすべてのグループの内容が閲覧できるようにすることで、担当以外のグループの実習指導や学生の状況を確認できるようにして、指導することに対する不安や指導内容の差異が生じにくいようにした。

#### 4. オンデマンド授業、ハイブリッド実習による学生の変化

学生は、初めて事例を通して一連の看護過程展開を学び、実習で実際の対象に看護過程を展開する。臨地実習では、提示されていない情報を自ら得ることに加え、刻々と変化する事態に対応する必要があり、事実の海に埋もれて、事実の中から情報をキャッチできないことも多くある。アセスメントの枠組みの定義は分かっているが、授業では実施できていても、実際にどんな情報をどうやって得るのかについては、初体験であり戸惑うこと



が少なくない。

2020年度は、こうした学生の状況に配慮し、看護過程展開論の初期から、アセスメントの視点とアセスメントに必要な情報リストを提示した。また、情報とアセスメントと看護上の問題が一枚の用紙に記載できるように記録用紙を工夫した。アセスメントに必要な情報が何かを提示することにより、情報記載量は増えた。さらに、アセスメントの視点を提示したことで、何について述べればよいのかが明確となり、いわゆる「アセスメントがずれる」ことは少なくなった。

また、オンデマンド授業、ハイブリッド実習にあたっては、看護過程展開論でも基礎看護学実習Ⅱでも、いずれもディスカッションボード機能を活用し他の学生の成果物を閲覧できるようにし意見交換の機会を設けた。授業および実習終了時には解答例も提示した。こうした工夫により、自分の成果物とは何がなぜ異なるのか、比較しながら学ぶ機会となり、自分で自分の不足に気づきやすくなったことが考えられた。

## V 今後の課題

今年度は残念ながら、看護過程展開論では対面授業が実施できず、基礎看護学実習Ⅱでは臨地実習が実施できなかった。代替として実施した方法は現時点では最良と考えた結果であった。今回実施した方法は今年限りの限定とは考えず、得られた良さを次年度以降にも活かしたい。

看護過程展開は、訓練することにより習熟する看護技術の一つである。ベッドメイキングや体位変換と同様に、正しい方法を知り、練習することにより習熟する。技術習得の方法には、まねて学ぶこともあり、熟練者の模倣や習熟した同級生の技術を見ることが修得の助けになることは、よく知られている。COVID-19による不測の事態に対する対応が端緒ではあったが、技術学習の原点に戻り、看護過程展開の学習方法を改めて考える機会を得た。同じ方法で違う事例を用いて実施することで、学びが深まり自信につながったという意見も得られており、技術学習として、練習できる授業展開を考えていくという示唆を得た。西谷ら<sup>6)</sup>の述べるように、実習を通して五感としてわかる助けとなるように授業を組み立てていきたいと考える。

厚生労働省医政局看護課の事務連絡<sup>7)</sup>の通り、2020年5月27日に新型コロナウイルス感染症第1回目の緊急事態宣言が全面解除となり、地域によっては、実習施設の学生の受入れも再開した。その一方では、医療提供体制の維持及び感染予防の観点から、引き続き、実習施設の学生の受入れ制限に伴い、臨地実習時間の短縮や実習中止等の対応が長期化することが想定されている。

臨地実習では初めての患者への対応や看護援助の提供など、学生が持つ知識技術・援助方法に困難を感じる。今年度のような学習・実習形態の変化は、学生にも大きな影響を及ぼすことが推察される。重岡ら<sup>8)</sup>は、学生は臨地実習で看護技術に関する不安や、記録・看護過程の展開、人間関係への不安が強いことを報告しており、実習再開にはこうした不安に対する配慮も必要である。

オンデマンド授業およびハイブリッド実習による影響については、時間を経て表面化することが予測されている。対面授業や臨地実習との違いは否定できない。技術練習量の不足や臨床経験の不足を感じる学生の不安も大きいことは容易に推察できる。領域別実習に入る際の援助技術練習への時間確保や臨地実習時における情報収集の仕方への丁寧な指導が求められる。学生も教員も誰も経験したことのないことに対する不安は大きい。しかし、今後は経済活動も医療もサイエンスも、そして教育も、ありとあらゆるものが原則として、オンラインでデータを介した方法になるという意見もあり<sup>9)</sup>、オンデマンド授業やハイブリッド実習が当たり前になることも考えられる。どんな状況になっても人を育てるのは人であるという想いを大切に、さまざまな可能性を検討しながら、学生に最良の教育を提供していくことが課題である。

## 引用文献

- 1) 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子他: 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較——基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して——, 千里金蘭大学紀要, 12, 123-134, 2015.
- 2) 青木光子, 岡田ルリ子, 関谷由香里他: 基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処方法, 愛媛県立医療技術大学紀要, 5(1), 57-64, 2008.
- 3) 荒川靖子, 櫻井美代子原案監修, 藤村龍子企画協

- 力：DVD 看護のためのアセスメント事例集 Vol.1 大腿骨頸部骨折患者の看護事例，医学映像教育センター，第2版，2019.
- 4) 小島善和原案監修，藤村龍子企画協力：DVD 看護のためのアセスメント事例集 Vol.3 糖尿病教育入院患者の看護事例，医学映像教育センター，第2版，2019.
- 5) 玉木ミヨ子原案監修，藤村龍子企画協力：DVD 看護のためのアセスメント事例集 VOL.9 肝硬変症患者の看護事例，医学映像教育センター，第2版，2019.
- 6) 西谷美幸，岩瀬裕子：基礎看護技術における教育方法の評価——看護の技と頭づくりをめざして——，保健科学研究誌，4，21-34，2006.
- 7) 厚生労働省医政局看護課：事務連絡 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について，2020.6.22. <https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf>, 2020.9.30. 検索.
- 8) 重岡秀子，池本かづみ，石崎文子他：成人看護実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態，健康科学と人間形成 2 (1)，17-26，2016.
- 9) 喜連川 優，浅川 直輝：IT を活用した新型コロナウイルス対策 教育や研究活動を止めないために，NII Today 88，<https://www.nii.ac.jp/today/88/1.html>，2021.1.5. 検索.